

「お金にならないが、やらねばならないことがある…」

恩師の元院長の近藤文雄先生（HP「雑学 BN」の随想等関係（Ⅰ）、2002. 4. 2.「辞職挨拶」：参照）が40年程前に故郷に帰り、医院の仕事の傍らボランティアグループ「太陽と緑の会」を創立し、後に障害者の通所作業所に発展した NPO の機関誌「わから版（2 P に貼付：抜粋）」が届いた。

その中に、近藤先生の言葉と、「夜明け前の子どもたち」等の福祉ドキュメンタリー長編映画の巨匠であった柳澤寿男監督の言葉に触れた文章があった。

近藤先生の言葉は「自然なこころの発露」であったが、就職間もない頃に先生から教えていただいた「惻隠の情（HP「雑学」のマスコミ等コメント関係（Ⅳ）2007.10.09.「人が本来持っている『惻隠の情』」）と通じる先生の言葉だなあと感慨深く目にした。

柳澤監督（HP「雑学 BN」の福祉・教育・医療関係（Ⅱ）、2003. 6. 2.「『働く』とは、どういうことか？」：参照）の言葉は、「お金にならないが、やらなければならないことがこの世にいろいろある…。貧乏してもやらなければならないことが、この世にある…」であった。

筋ジストロフィーを対象とした「ぼくの中の夜と朝」の映画作りの折に、監督から「『文明の発達』とは、どう考えるか？」と問われたが、応えられなかった。

その頃は、人類を月に送り始めた時代。

月に人類が行けるような科学技術の進歩の世の到来を『文明の発達』というのでなく、「自らの責任でないのに生きることによる不平等、不公平、不自由を被っている人々から、社会の責任でそれらを取り除いていく世を作り上げることこそ『文明の発達』と云うべき。

そのためにも一人一人の心に精神革命（価値観の変容）を呼び起こすぐらいの気概で仕事するように！」と教えられた。

それだけに、「お金にならないが、やらなければならないことがこの世にいろいろある…。」と云う言葉が、30数年を越えてもずしりと響いてくる。

今更ながら、お二人から自分の精神構造に多大の影響を受けていることに改めて気づき、少々現状に甘んじている今の自分を叱責されているように思え、改めてお二人の言葉に接し、緊張からか身震いする。

追伸：

「太陽と緑の会」の HP は、HP「雑学 BN」のリンク関係（Ⅰ）に掲載・リンクしています。

この HP には、地元新聞に掲載された近藤先生のエッセイ集の掲載コーナーもありますので、ご覧ください。

- ・コラム「自然なこころの発露」
- ・お知らせ（青年長期ボランティア活動終了、環境ボランティア交流会）
- ・ボランティア雑感（西村洋平）
- ・太陽と緑の会 事業の概要
- ・ご支援下さった皆様 / 編集後記

NPO法人 太陽と緑の会

かわら版

2009年2月 130号

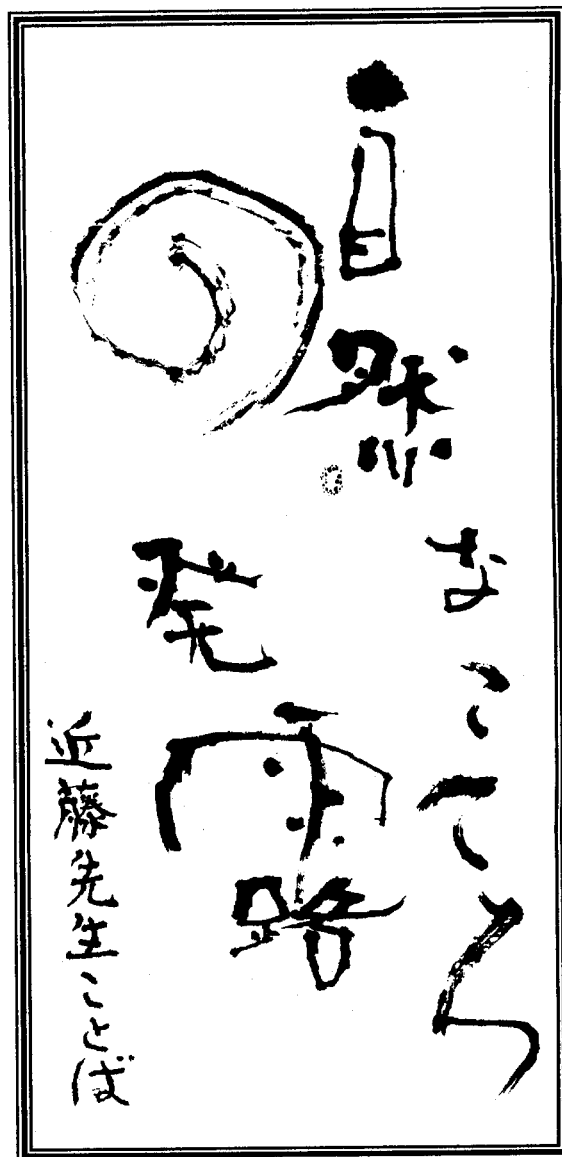
— 「自然なこころの発露」 —

杉浦 良

太陽と緑の会ホームページ製作の裏方役で頑張ってくれている柴野さんに、ホームページのリニューアルをお願いしました。ホーム画面に太陽と緑の会創立者近藤文雄の碑の写真を載せていましたが、碑文そのものに替えました。

碑文の「自然なこころの発露」は、創立者近藤文雄が逝去する前、太陽と緑の会を作ったスピリットを分かりやすい言葉で言い表すと、どんな言葉になるかという問いに「そうだなあ・・・、自然なこころの発露とでもいう意味の短い言葉があれば・・・」と語った後、まるで命のロウソクが燃え尽きるように旅立ちました。その短い言葉を私は見つけられずに、そのままを創立者の言葉として残すことにしました。書は京都在住の書道家、磯田充子さんをお願いしました。右手で精魂を傾けて書かれましたが納得いかず、最後は左手で描くことで、この作品を仕上げてくださいました。言葉の意味を、書に表すことの難しさは、私ではうかがい知れませんが、何度もこの「自然なこころの発露」を見ているうちに、これはこのような書体で書かれるべくして、近藤文雄の口から語られたのでは・・・と思えるから不思議です。

「上手なのか下手なのか分らんような字だが、何かホワホワっと心に残る・・・」などと言われた方もいますが、私は的確にこの書の意味をつかんでおられるのだと思いました。このように言葉と書が出会うことができ、有難いことに太陽と緑の会のホームページも飾



書：磯田 充子

ることができました。ところで磯田充子さんのご主人は、今は亡き福祉ドキュメンタリー映画の巨匠と言われた柳澤寿男氏です。学生時代、私たちにお付き合いいただき、福祉や映画や人生すべてにわたって影響を受けました。

「お金にならないが、やらなければならないことがこの世にいろいろある・・・。貧乏してもやらなければならないことが、この世にある・・・。君たちは出世して、私をマネーヘルプしてくれれば一番有難い・・・。」

ネルドリップで京都イノダのコーヒーを入れながら、若造相手に人生を語る映画監督の存在が光り輝いていた頃、気がつけば、随分大切なものを頂いていたことになります。ひょっとして、これが自然なところの発露の種かもしれません。